

70年代の新品種

りんごの品種更新

青森県りんご試験場

山 田 三 智 穂

品種更新の動向

わが国におけるりんご主産県(青森, 岩手, 秋田, 山形, 福島, 長野)の品種更新計画は, 第1図と第2図のとおり, 昭和41年には面積割合62.6%をしめていた国光, 紅玉を, 昭和46年には41.5%に, 昭和51年には22.3%にさげることになっている。

その代り昭和41年には15.6%であったデリシャス系を, 昭和46年には22.3%, 51年には28.1%に, さらに41年の統計資料にあらわれていない「ふじ」は, 昭和46年には14.3%に, 51年には22.5%と大幅な計画を見こんでいる。

この計画がそのまま実現しないとしても, 各県の品種更新に対する意欲は非常に積極的なものが

窺われる。ということは, 品種更新による経営改善が, 経営規模の拡大や流通機構の改善にくらべて, はるかにやりやすく, しかも効果が早く, 直接的に現われるからである。

しかし, りんごは永年作物であるから, 稲や野菜のような一年生作物とはちがいが金がかかり, 収益もかなり長年月にわたって影響を受けるので, 更新計画には慎重を期することが大切である。

品種選択上の注意点

品種を選択するにあたって, 共通している注意点を列記すると次のとおりである。

(1) 消費力のつよいものをえらぶ。

ア. 味覚のすぐれていること。イ. 貯蔵力があること。

(2) 作りやすいこと。

ア. 豊産性であること。イ. 樹勢が強健であること。ウ. 病虫害の防除がしやすいこと。

(3) 適地適産であること

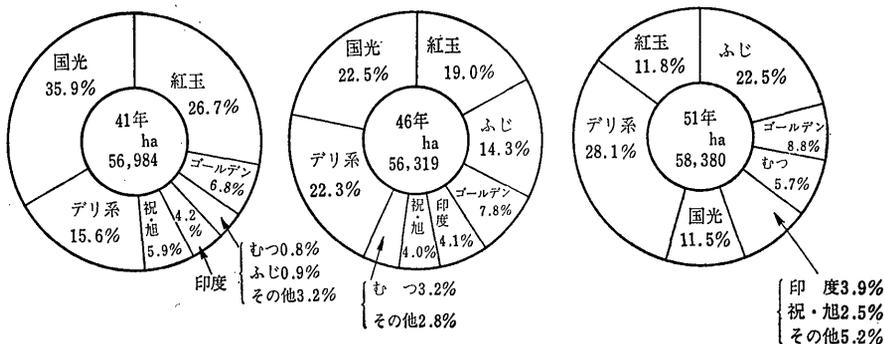
ア. 土壌に適した品種であること。

(4) 品種の組合せをよくする。

ア. 労力配分がうまくいくこと。イ. 危険分

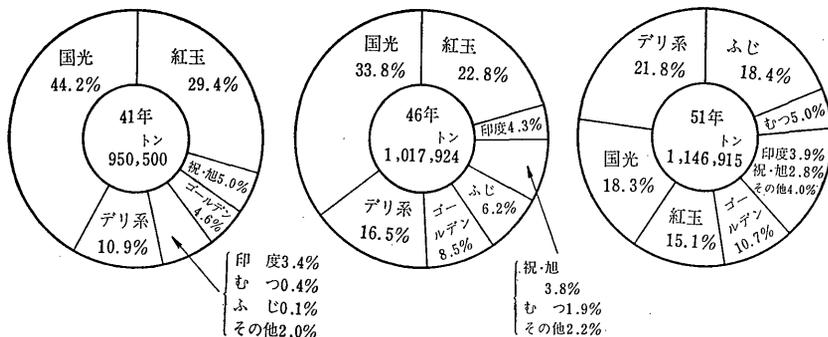
第1図

品種別面積割合



第2図

品種別生産割合



散をはかる。ウ。品種の混植をする。

(5) 省力栽培ができること。

ア。無袋栽培ができること。イ。着色に苦勞が少ないこと。ウ。結実力の旺盛なこと。

(6) まとめて作る体制が必要

(7) 10年以上の栽培経歴をもっていること。

(8) 特性不明な品種と系統は試作にとどめる

70年代に増殖される新品种の特性

ふじ 農林省園芸試験場盛岡支場で育成した品種で、33年に発表、両親は国光とデリシャス。4～5年生から結実し始め、採取適期は10月末から11月中旬。形は円ないし長円。縞状に着色し国光に類似する。平均300グラム以上となる。甘味つよく果汁が多い。肉質はクリップで食味がすぐれている。収穫直後から4月まで貯蔵できるが、3月以降の酸味が少ないと云われている。

陸奥 青森県りんご試験場の育成で、23年に発表。両親はゴールデンデリシャスと印度。4～5年生から結実し始め、採取適期は10月下旬から11月上旬。長円形。無袋栽培では陽光面は若干紫紅色に着色するが、近年着色したものが高価に販売されている。12月から2月にかけて、よい味をもっている。ゴールデンより貯蔵力がすぐれているので、大果の特性をいかし贈答用果として、将来全栽培面積の5%位になる見込みである。

品種更新の方法

苗木更新と高接更新の2つに大別される。

苗木更新はさらに①間植更新、②間伐更新、③皆伐更新の3つに分けられる。

また、苗木更新においては、何年生の苗木を用いるか、台木に何をを使うか、何本植えにするか等によって、高接更新においては、接木の方法や接木の個所数などによって、品種更新に要する経費、更新によって生ずる一時的な生産量や、収益の減少程度、その回復に要する年数などが異なる。また、これらは更新前と後の品種が、何であるかによっても異なる。そして、どのような更新方法がよいかは、経営規模や資金力、園地の土壤条件、栽培距離、地力、樹勢、台木の種類によって異なるので一概にいえない。そこで自分の経営に適した方法を、自分で選ばなければならない。

高接更新には漸進更新と一挙更新の2つがある。前者は一樹に10本内外、後者は30本から70～

80本内外接木する方法である。

収量をおとさず、長期間で更新を完了しようとする場合は前者を、収量をおとしても品種更新をした方が有利な場合は、後者を採用する。

しかし、いずれにしても高接病発生の危険を伴うので、十分な高接病対策が必要である。

高接の早期結実には、⑦1年枝の長穂接(5～10芽)、④2年枝などを使用すると有利である。

接木時期は、中間台の樹液が流動している5月上旬頃がよい。接ぎ方には切接法、割接法、皮下接法などが応用されるが、接木後の癒合組織の発達は割接法が最もよい。

高接実施上の注意点

- ① 一挙更新を行なうには、接木時まで剪定しないでおいた方が、望む位置に接木できる。
- ② 一挙更新では銀葉病が発生しやすいので、切口に侵入防止剤を塗布する。
- ③ 接木の位置は、主幹を中心として、適当な間隔で想定した同心円上に行なえば、更新を有利に行なうことができる。この際、外部の円周ほど接木本数を多くする。
- ④ 接木は枝の背面に行なうと、高接した枝が直立して整枝上不都合になるし、また結実もおくれるので、側面にのびるように接木する。

高接後の管理

- ① 高接した品種が樹上に直立し、このため樹形がみだれ、また樹が高くなりやすいので、大きくならないうちに誘引する。誘引は、接木2年目から5月と7月の2回に分けて実施しポリナワでなく、普通のなわを使用する。
- ② 高接した枝は風害によわいので、接木後にそえ木するか、もしくは接木部位に、ナイフで2～3カ所傷をつけておくのもよい。

高接病対策

- ① できるだけ無毒の穂木を分けてもらう。
- ② 台木の種類をみて高接する。
- ③ 肥培木の準備と実生台木の養成をはかる。
- ④ 高接病にかかっている樹は、全花、全摘果して中間台を強くきりつめる。
- ⑤ 実生台の寄接
- ⑥ 挿木接(祝、国光の一年枝)
- ⑦ 4月～6月に接木部位に窓ワクをつけて盛土する。腐熟堆肥をまぜると保水力がつよい。
- ⑧ 樹勢を判断し見込みないものは伐採する。